

事例 3 100年、200年と家を住み継ぐ

匠の技術と現代の快適性を 両立させた古民家再生

日本の住宅の耐用年数はおよそ30年だという。つまり、親が建てた家は子どもの代までもたないということだ。何代にもわたって住み継ぐことを前提に設計された江戸時代の住宅とは、思想がまったく異なるというてよい。しかし、環境意識が高まる中、住宅の在り方も見直すべきときに来ている。実際、近年では古き家のよさを見直し、改修しながら長く住み続けようという機運が高まっている。古民家再生もその一環といえる。

築後100年を超える古民家には、住み継ぐための知恵が数多く詰まっている。古民家の多くは、非常に太い無垢材が柱や梁に用いられており、高い強度を誇っている。また、柱や梁というフレームで強度が保たれているため、窓や扉の増設、開口部の拡大、間取りの変更などを

自由に行うことができる。さらに、前段で紹介したように金釘を使わない継手仕口の技法が使われているため強度劣化の心配はない。一方、現代の住宅は、構造部を接合金具で連結する工法が主流であるため、完成直後の強度は高いが、時間の経過とともに錆や腐食、ボルトの緩みが生じる可能性がある。また、壁と床を強固に一体化した構造が多く、金物の交換や破損箇所の修復が難しく、金物の寿命が住宅の寿命を決めるとの指摘もある。

数々の古民家再生を手掛けてきた株式会社和田工芸の和田勝利氏は次のように話す。「古民家の再生は住み手のニーズに合わせる事が重要です。柱や梁など優れた構造材は最大限に生かすべきですが、100年前の生活習慣をすべて継承することはありません。『寒い』『暗い』『不便』といった古民家の弱点を解消し、生活スタイルに合う間取りに変えた

り、断熱材を取り入れるなど、現代の技術をうまく融合させることが、長く快適に暮らすための秘訣です」。

住み継ぐ文化は現代の住宅技術と融合して継承される傾向にあるが、その実現には、伝統的な継手仕口などの技を習得した職人が欠かせない。匠の技を継承する人材の育成が住宅業界の大きな課題となっている。



写真上：和田工芸が手掛けた再生古民家（埼玉県春日部市）

写真左：骨太な柱や梁などの構造部はそのまま生かされている